

診療所 マニュアル

CLINIC MANUAL
第3版

目次

序	高久史麿	2
---	------	---

● 総論 7

診療所の医師とは？	山田隆司	8
-----------	------	---

● 診療所の医療 13

急患への対応	崎原永作	14
--------	------	----

慢性疾患		
ーそれはいつ、どうやって発生するのだろうか	松岡史彦	21

在宅医療		
ー往診カバンの中には何が必要か	新谷拓也	28

他院への紹介		
ー上手な紹介状の書き方	松井直樹	34

救急搬送		
ーどこまで診療所医師がすべきか	崎原永作	39

地域支援における診療業務は、どこまで対応すべきか	片山 繁	48
--------------------------	------	----

在宅での看取り		
ー医療的な問題・家族へのケア	畑野秀樹	53

死亡診断書の書き方、検視に呼ばれたら	廣田俊夫	59
--------------------	------	----

観光客への医療	伊藤雄二・眞貝美由規	66
---------	------------	----

患者さんとの付き合い、家族のケア	臼井恒仁	74
------------------	------	----

● 診療所のマネジメント 79

診療所の経営（スタッフマネジメントも含めて）	川原田 恒	80
------------------------	-------	----

診療所長が知っておくべき制度	木下順二	84
----------------	------	----

使いやすい診療記録のあり方	杉田義博	108
---------------	------	-----

● 保健 115

初めての乳幼児健診	宮本朋幸	116
-----------	------	-----

学校医になったら	森藤哲章	121
----------	------	-----

禁煙支援のコツ	松井直樹	128
---------	------	-----

健康教室の企画から運営まで	武田以知郎	134
---------------	-------	-----

産業医って何をやる？	川原田 恒	142
------------	-------	-----

● 福祉 151

介護保険		
ー認定審査会に呼ばれたら	中村泰之	152

地域包括ケア		
ー多職種と上手に付き合う	折茂賢一郎	155

老健・介護施設囁託医の役割	鈴木孝明	161
---------------	------	-----

● 組織作り 171

感染管理にチームで取り組む	梅屋 崇	172
---------------	------	-----

● 地域とのかかわり 179

地域行政とのかかわり		
ー健康づくりの中心的な担い手になるために	岩室紳也	180

診療所の医師が健康や生活支援に関する地域活動にかかわるといこと	八森 淳	186
---------------------------------	------	-----

● 自己学習 193

地域で臨床研究を行うには	桐ヶ谷大淳	194
--------------	-------	-----

● 診療所での教育 201

やってみよう、地域での教育	吉村 学	202
---------------	------	-----

● プライベートライフ 213

地域での暮らしを楽しく過ごす	望月崇紘	214
----------------	------	-----

索引		218
----	--	-----

在宅医療 －往診カバンの中には何が必要か

● はじめに

診療所医師の仕事の中で、往診は、地域を支えるために大変重要な仕事である。病気や障害を持つ人が、住みなれた地域で長く暮らすために重要な役割を果たすことはもちろんのこと、急な病気やけがによって自分で診療所まで行けないときに、いつでも医師が自宅に往診してくれるということは、その地域で生活する上で、地域住民に大きな安心を与えるものである。その往診に欠かせないものが往診カバンである。

筆者が初めて往診に行ったのは、初期研修を終えたばかりの医師3年目の時であった。それまでは病院の中での診療しか知らず、医療機器に囲まれ、困ったらすぐ検査する、専門スタッフを呼ぶといった形の医療しか知らなかった筆者にとって、往診カバン一つ持って初めて会う患者さんの家に往診に行くということは、不安がいっぱいで大変な重圧を感じていたことを、今でも昨日のここのように覚えている。幸い、その時の往診カバンには、訪問先の患家で必要なものがすべて入っており、無事初めての往診を終えることができた。

往診には、慢性疾患の患者さんの往診もあれば、急な病気の患者さんへの往診もある。往診カバンの中には、そのさまざまな状況を想定した上で、必要と思われる道具や薬品が詰め込まれている。その中身は、医療機関によってさまざまであり、また、診ている患者さんの病気や状態によっても異なると思われる。必要なものを挙げだすときりがなく、あれもこれもと何でも入れておきたくなるものである。しかし、往診カバンのスペースには限りがあり、比較的使用頻度の高いもの、および緊急時に最低限必要と思われるものを優先して、とにかく、いつ何時往診依頼があっても、これだけあれば最低限の対応はできるというものをに入れておきたい。本稿は、筆者の診療所の往診カバンを参考に、往診カバンの中には何が必要か、なぜこれが必要かを項目別に分けて述べる。

● 医療機器

ほとんどの診療所の往診カバンに聴診器、血圧計、パルスオキシメーターが入っており、必須であると思われる。定期的に往診している患者さんに対して、聴診、血圧測定、酸素飽和度の測定は日常診療の一環で行われており、急な病気での往診時にもこれらは欠かせない道具である。また、往診先で血液検査をすることがあるので、採血スピッツ、注射器、注射針は血液検査セットとして同じ袋に入れてまとめておくことと便利である。アルコール綿や駆血帯、ブラッドバンも忘れないようにしたい。最近では1回分ずつ包装されたアルコール綿（ワンショットプラス[®]等）があるので、管理が楽なことからも、できればそれを用意しておきたい。また、安全面から感染防止を考慮して、使用後の針やシリンジ、汚染物を入れるための医療廃棄物入れも重要で、ぜひ用意しておきたい。医療廃棄物入れは、大きさは各種用意されており、往診カバンにも十分収納できる。あくまで往診時に使用するだけなので、大きなものは不要。咽頭培養をすることもあるので、培養用の咽頭スワブも用意する。感染症の際に起因菌を調べるのに用いるだけでなく、施設入所用の診断書にMRSA培養を求められることもあるため、時々使用する。在宅療養中の患者さんには誤嚥性肺炎や尿路感染症を発症する方も多いため、喀痰培養や尿培養のスピッツもあれば便利である。また、尿試験紙を入れておけば、糖尿病患者さんの血糖管理だけでなく、尿路感染症や尿管結石症の診断にも役立つ。尿試験紙の種類も測定項目数によっていろいろ用意されており、少し高価だが、尿中白血球を測定できるものも販売されており、予算に余裕があれば購入を考えてみたい。血糖測定器もあれば便利で、糖尿病患者さんの血糖管理が主になるが、意識障害の患者さんの鑑別に役に立つ。

● 医薬品、医療材料

医薬品、医療材料に関しては、種類も大変多く、同じような効果・効能のものでも、その診療所で採用されている銘柄はさまざまである。自分の使い慣れたものを用意すればよく、ここに出てくる医薬品、医療材料名に関してはあくまでも参考程度に、なぜそれが必要かという考え方を参考にさせていただきたい。

まず、往診カバンに入れるアンプルケース（注射アンプルを入れる箱、写真1）があると収納に便利である。アンプルケース内に両面テープが付いていて持ち運んでもずれないようにしているものもある。注意しなければいけない点は2点。

行う事務職員も、介護を行う介護職員も、家族も患者自身もメンバーである。教育や啓発まで含めると、医療介護の現場のすべての方が対象となる。

● 診療所で遭遇する感染症とその対策

診療所は医療の前線基地である。外来診療や入院診療を行っている。そこで遭遇する恐れのある感染症は多岐に及ぶが、その対策の中心となるのが、標準予防策である。標準予防策は1987年、アメリカ疾病管理予防センター（Centers for Disease Control and Prevention：CDC）から提唱されたもので、すべての血液・体液・分泌物を扱うときにとる対策である。つまり、感染症が不明の場合にも行うことのできる対策である。医師、看護師、事務職員などの診療所のメンバー全員が理解・実践すべき対策である。患者やその家族にも教育指導が必要である。

1. 標準予防策

すべての血液、体液、排泄物、傷のある皮膚、および粘膜を扱う際の予防策である。すべての患者の診療・ケアに際して適用する。

① 手洗いまたは手指消毒

患者から次の患者に接触する間に手洗いまたは手指消毒が必要。血液、体液、排泄物に接触した時や手袋を外した後は手洗いが必要である。

② 手袋

血液、体液、排泄物、傷のある皮膚、粘膜に接触する時に手袋を着用する。

③ マスク・ゴーグル・フェイスシールド

血液、体液、排泄物の飛沫が眼、鼻、口に飛入する恐れがある場合に着用する。

④ ガウン

血液、体液、排泄物で衣服が汚染する恐れがある時はガウンを着用する。滅菌は必要なく、汚染された場合は交換する。

⑤ 器具・器材

可能な限り使い捨ての器具や器材を用いる。血液、体液、排泄物が付着したあと、再使用する場合は洗浄処理されるまで他を汚染しないように注意が必要である。

⑥ リネン

血液、体液、排泄物で汚染された場合は洗浄処理されるまで他を汚染しないよ

● 診療所における医療と感染対策

2003年にSARS（重症急性呼吸器症候群）が、2009年には新型インフルエンザが流行し、新興感染症の脅威が実感された。医療の最前線である診療所でも適切な対策が必要となった。感染する恐れのある疾病に対して適切な対応をとることを感染管理という。診療所には、さまざまな患者さんが訪れる、つまりさまざまな感染症がやってくる。インフルエンザやHIV感染症など枚挙にいとまがない。新興感染症ばかりでなく、肺結核など以前からある感染症についても留意が必要である。訪問診療における患者宅も診療所医療のフィールドであり、訪問看護や学校、職場などさまざまな分野において感染管理が必要とされ、時に医師は助言を求められる。

本稿では、感染管理の基本となる経路別感染対策（表1）について、診療所で行う場面に応じて述べる。

表1 感染経路別予防策

	接触予防策	空気予防策	飛沫予防策
手袋	部屋に入るとき着用 汚物に触れたら交換する 部屋を出るとき外し手洗いをする		
マスク		N95マスク	1m以内は外科マスク
ガウン	患者に接触しそうとき着用 部屋を離れるとき脱ぐ		
器具	専用		
患者配置	個室隔離	個室	個室隔離
	集団隔離	1時間に6回換気	集団隔離 1m以上離す
患者移送	感染部位を覆う	外科マスク	必要なときマスク

● 感染管理の同志たち

感染管理を行うのは、医師だけではない。看護師はもちろんのこと、受付や会計を

地域での暮らしを楽しく過ごす

● はじめに

楽しみ方というのはまさに十人十色である。ここでは筆者なりの楽しみ方について記したいと思う。

● なぜ地域医療を目指したか、
そこに地域を楽しむという私の原点がある

私は卒業前から総合医や地域医療に興味があったわけではない。初期研修終了後には出身大学の医局に戻ることを念頭に何科に進むか悩んでいた。多くの先生方からは自分が一番興味のある分野を選ぶのがよいと言われたが、私としては内科も外科もマイナー科もそれぞれちょっとずつ興味はあるものの、いざ何科にするのかと決めかねていた。また、そもそも臓器別の専門医療そのものに違和感を覚えていたこともあり、なおさら悩んでいた。

そんな中、指導医のはからいにより沖縄宮古島で2ヵ月間訪問診療の研修をする機会を得ることができたのだ。病院を飛び出して家の中まで入り込んでいくことで、個人の疾患だけでなく、家庭の様子、地域の特性とともに診療をすることの意味、素晴らしさを垣間見ることができた。そして、ただ観光客としてその地を訪れるのとは異なり、医師として肌身でその地域の人々、文化と触れ合うということができた。

この経験は私にとって何物にも代えがたい貴重な経験であった。いわゆる医局が敷いたレールに乗って専門医試験をパスし、学位を取得して、大きな病院の院長や教授を目指していくという生き方もいいであろう。しかし私は、病院から地域に飛び出し、そこに自ら暮らしながら診療をすることで、医師として住人として地域と触れ合いながらさまざまな地を巡り、多くの経験をしていきたいと思うようになった。結局のところ自分が興味のある分野をもとに科を選択するというのではなく、自分がどういう人生を歩みたいのか、それを最も大切な軸として考えた上で地域医療を志すことにしたのである。

● 赴任先は旅先

そうして赴任した地は、私にとってある意味で旅先なのである。実際に住民票を移し、年単位でそこに暮らし生活をしているわけであるが、旅なのである。それも有名な観光地でテレビに映って、「あ、私ここ行ったことがある!」と自慢気に話をするレベルとはわけが違う。歴史、習慣を学び、人々と共に笑い、酒を酌み交わし、自らその地域で働いてその地に貢献し、旅をしてきたのである。それが有名な観光地であろうが、無名な一集落にすぎなかろうが、私にとっては人生の旅の一つなのである。

せっかく旅で訪れたら楽しまないでいたらもったいない。その地の名産に舌鼓を打ち、温泉に入り、釣りをしたり、バーベキューをする。春は桜、秋は紅葉を楽しむ。地元の運動会や祭りなどのイベントにも参加する。

私のこの考えは一方で、実際にそこで骨を埋める覚悟がなく、その地を離れることを前提としているようで無責任だという言葉方をすることがある。しかし、全力でその地域を楽しみ、全力で医療をやっていたら決して無責任ということにはならないのではないか。結果として予定より長く滞在することもあるだろう。中途半端にいやいや派遣され、任務終了を待ちわびるのはわけが違うのである。事情によりやむを得ずそこで骨を埋めるよりも、楽しく診療をして楽しく生活をしている方がよほどいいと思う。

どんな些細なことでもその地に無縁の人がただ訪れただけではできない経験だと思っただけで、役場から参加を要請された会議や自治会の集まりでさえなんだか楽しくなってくる。

● 地域での楽しみ

1. Let's enjoy 畑

患者さんからさまざまな新鮮な野菜をもらうことがあるが、いざ自分で畑をやってみると、これがまた実に面白い。診察の際も畑の話だけで終わってしまうことがよくあるくらいである。畝の作り方、種の蒔き方、肥料のやり方、収穫のタイミングなどやってみるとポイントがいくつもある。こちらは医療のプロとしてその地にいるわけである

